

## 狩りとエコ・コンシャスネス

羽 澄 直 子

### Hunting and Eco-consciousness

Naoko HAZUMI

「ネイチャーライティング」というジャンルが、1990年代に入ってアメリカ文学研究の中で注目を集めている。ネイチャーライティングとは、元来自然をめぐるノンフィクション文学を指すものであったが、ネイチャーライティングの視点が、フィクションを読む上での指針として有効であることはいうまでもない。環境、自然といったものがフィクションを含む文学作品の中でどのように記述されているかを分析することによって、新しい読みの可能性が立ち現れる。この読みに従えば、ネイチャーライティングというジャンルに包括されるフィクション、というものも成り立つのである。

先頃出版された論文集『アメリカ文学の〈自然〉を読む』の中に、ネイチャーライティングの性質について次のような記述がある。

ネイチャーライティングの世界はけっして自然や環境との安定的な関係を至福のように反復しているわけではない。そこに開かれる経験の場では、「自然」との接触を介してたちまち人間的なものの属性が問いに付され、文化論的にも倫理的にも激しく揺さぶられる。そのような揺さぶりと葛藤こそ、「自然」ひいては「環境」との関係を再考するための大きな契機となるはずなのだ。(野田研一「エコクリティシズムの方法」『アメリカ文学の〈自然〉を読む』9)

ウィリアム・フォークナーの「熊」(“The Bear” 1942) は一言で言えばまさに、少年時代にオールド・ベンという大熊に出会ったアイザック・マッキャスリンの「揺さぶりと葛藤」を主軸にすえた作品と見ることができる。従って「熊」はネイチャーライティングの性質を持つフィクションと呼べるであろう。また「熊」には、ネイチャーライティングに不可欠な「自然」、「環境」といった要素が、オールド・ベンという大熊に凝縮されるような形で描かれている。そこで本論では、ネイチャーライティングの観点を意識しつつ、アイザックに「揺さぶりと葛藤」を与える「経験の場」となった、オールド・ベンをめぐる狩りについて考察してみたいと思う。

オールド・ベンは森を熟知しているハンターたちの間ではすでに伝説化した存在で、ハンターたちはこの熊を長い間追っている。納屋を荒らしたり家畜を殺したりするオールド・ベンに恨みを持つこともあるが、同時に熊の持つ野性味の壮大さには充分敬意を表し、その魅力に取りつかれている。オールド・ベンの凄さを認識した上で、彼らはオールド・ベンと戦う

にふさわしい、精神と技術を身につけようとする。こうしてハンターと熊の間には同じ土壌に生きるもの同志の連帯感、兄弟愛のようなものが築かれ、土地の物語が誕生する。

It was of the men, not white nor black nor red but men, hunters, with the will and hardihood to endure and the humility and skill to survive, and the dogs and the bear and deer juxtaposed and relieved against it, ordered and compelled by and within the wilderness in the ancient and unremitting contest according to the ancient and immutable rules which voided all regrets and brooked no quarter; . . . (“The Bear” 191-2)

自然の秩序の中で、人間の方が自然環境に歩み寄ることによって、初めてオールド・ベンのような偉大なけものをめぐる狩りが成立する。狩りの間、ハンターたちはウィスキーを「不滅な野性の精神が凝縮されたもの」として控えめに飲むぐらい、謙虚になる。未熟なもの、傲慢なものは手痛いしっぺ返しを受ける。例えば「熊」では、無鉄砲にオールド・ベンに向かっていく犬たちはすぐに叩きのめされるし、熊狩りを気楽に見学しにきた町の人達は森で怯えて迷子になったりする。痛快なのは、フォークナーより一年早く誕生した宮澤賢治の「注文の多い料理店」(1924)で、二人の若い都会の紳士がびかびかする鉄砲を抱えて「なんでも構はないから、早くタンタアーンと、やつてみたいもんだなあ」「鹿の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞うしたら、ずいぶん痛快だらうねえ。くるくるまはつて、それからどたつと倒れるだらうねえ」(40)などと言いながら山に入ったものの、結局やまねこにさんざんな目にあわされて顔がくしゃくしゃの紙屑のようになってしまう。

自然のおきてに逆らわないすぐれたハンターの物語に従って、謙虚に自然に教えを請い、すぐれたハンターになろうとしたのが、アイザック・マクキャスリン、通称アイクである。10歳で初めて狩りのキャンプに参加したアイクは、ネイティブ・アメリカンの血を引く年老いたハンター、サム・ファーザーズの手ほどきを受ける。そしてアイクの成長の度合いのバロメーターとなるのが、オールド・ベンであった。狩りに参加する前からオールド・ベンの伝説に親しんでいたアイクは、気楽に熊狩り見学にいつてうろたえる無知な都会人と違い、森のなかの修業時代をおえて、自分がハンターになる値打ちのある人間だということがわかって初めて、やっと自分はオールド・ベンのゆがんだ爪痕を見分けることが許されるのだと考えていた。ここでいう「ハンターになる値打ちのある人間」とは、原生自然、ウィルダネスの秩序に完全に身をゆだね、勇気、忍耐、誇り、謙譲の心を持って、同じ土壌でウィルダネスと正面から向かい合うことができる人間のことである。しかしアイクは、オールド・ベンが値踏みするかのように自分を観察している気配を感じても、かんじんの姿どころか、足跡すら見つけることができない。やがて彼はサムの助言を受けて「ウィルダネスの秩序に完全に身をゆだねる」とは、ウィルダネスとは相いれない文明の利器からいっとき完全に自由になることだと悟り、鉄砲、時計、磁石を捨てて、森の中へ入る。そして少年はついに初めて熊の姿を見ることに成功する。アイクは11歳になっていた。このオールド・ベンとの初の邂逅は何とも幻想的な場面として描かれている。

Then he saw the bear It did not emerge, appear it was just there, immobile, fixed in the green and windless noon's hot dappling, not as big as he had dreamed it but as big as he had expected, bigger, dimensionless against the dappled obscurity, looking at him Then it moved. It crossed the glade without haste, walking for an instant into the sun's full glare and out of it, and stopped again and looked back at

him across one shoulder. Then it was gone. It didn't walk into the woods. It faded, sank back into the wilderness without motion as he had watched a fish, a huge old bass, sink back into the dark depths of its pool and vanish without even any movement of its fins. ("The Bear" 209)

こうして一度文明を捨てて、自然の秩序に組み込まれたアイクは、めでたくオールド・ベンに認識される。以後彼は森の中を自由に歩き回り、熊の足跡をたどったり、鉄砲を持ったまま熊を見ることができるようになる。

さて、先程引用した邂逅場面で描写されるオールド・ベンは、熊というリアルな固体というよりは、森での修業によって自然と文明という二項対立を意識したアイクの目から見た、とてつもなく大きく、侵すことがとんでもない冒瀆だと思えるような、威厳に満ちたウィルダネスそのものであろう。時計や磁石を捨てて初めて会えた熊は、少年が属している汚れた文明とは対照的な「無垢」を具現化したものだ。ここでは文化、文明が、汚れたもの、悪の象徴として、無垢なもの、善を表す自然とは全く対立するものとして扱われている。彼は熊の姿に、文明の浸食に静かに抵抗する無垢なウィルダネスの孤独な戦いを見いだしているのである。

しかし森のおきてを学び、狩りの知恵を身につけ、実際に鹿や他の熊などを射止めるようになったアイクは、オールド・ベンの象徴性と同時に現実性もきちんと把握している。オールド・ベンとて結局はこの世の動物なのだ。例えば無謀にもオールド・ベンに飛びかかろうとした犬を追いかけて捕まえたとき、熊はアイクの前に立ちはだかり雷鳴のようにそびえたっていたが、同時に彼は熊の強烈な熱い臭いをかぎ、熊の生身の野性を確かに実感する。彼をキャンプに連れて行くド・スペイン少佐たちが、毎年11月に実際にオールド・ベンを殺す意図を全く持たずにキャンプに出かけるのは、それが殺すことのできないけものだったからではなく、実際にそれを殺すことができるという希望を今まで彼らが持ってなかったからだということも彼は知っている。サム・ファーザーズたちに欠けていたのは、オールド・ベンを追う犬なのだが、アイクが13歳の時、ついに熊と互角に戦える野性の犬ライオンが見つかる。

アイクは、ライオンの出現により、オールド・ベンの最期が近づいたことを知る。今まで準備不足を理由に延ばし延ばしにしてきたオールド・ベン狩りのお膳立てはすべて整ったわけだが、アイクたちハンターにとって、この熊狩りは単に熊が一頭死ぬこと以上の意味を持っていた。彼らはオールド・ベンの最期に、ウィルダネスの終焉を重ね合わせていたからだ。最後の熊狩りを迎えて、オールド・ベンの象徴性が現実性より強く意識されるようになる。「熊」ではウィルダネスの具体的な場として、ド・スペイン少佐たちが年に一回狩りに訪れる、オールド・ベンの住む森が舞台となるが、実はこの森は "that doomed wilderness whose edges were being constantly and punily gnawed at by men with plows and axes" ("The Bear" 193)、つまりすでに文明にじわじわ追いつめられ、自由を奪われて囲いこまれた地域なのである。狩場の森の中へアイクたちが四輪馬車で入ろうとすると、それは一瞬彼らを受け入れるために開き、すぐ閉じてそのあとをふさいで、彼らが今来た世界を隔絶する。その中に入り込んだ馬車は、大海原に漂うボートのように小さく頼りない存在だとアイクは感じるが、この森が完全に侵略されるのも時間の問題であった。森がウィルダネスのまま、曲がりなりにも保たれているのは、所有者（森を「所有」しているという概念そのものが、自然を脅かす人間の傲慢さを表しているとも言えるのだが）ド・スペイン少佐が森を売らずにいるからだ。少佐は "an anachronism indomitable and invincible out of the old wild life" ("The Bear" 193)であるオールド・ベンが自由に駆けまわる場を守り、オールド・ベンもそのことを知っている、つまり両者の間には暗黙

の了解がある、と少なくともそう考えている。だから家畜小屋が襲われたとき、オールド・ベンの仕業だと思った少佐は “I’m disappointed in him He had broken the rules . . . But now he has come into my house and destroy my property, out of season too He broke the rules” (“The Bear” 213-4) と怒りをあらわにしたのだった。あとでこれはライオンの仕業だったと判明するのだが。

熊とハンターの戦い自体は、昔から至る所で繰り返されてきたもので、何も特別な現象ではない。熊も、それに魅了されるハンターも、どちらかが倒れてもあとを継ぐものが現れ、何世代にも渡って戦いは続けられてきた。しかしフォークナーの「熊」における熊とハンターの戦いの歴史はオールド・ベンの時代で終わりを告げる。オールド・ベンは跡継ぎを持たず、戦いの場そのものも今失われつつあるからだ、アイクにとって何より辛いのは、狩りの歴史を終わらせたものが文明の名のもとに無軌道に自然を破壊していった人間であるという自覚であろう。“So he should have hated and feared Lion” (“The Bear” 209) という一節が、「熊」の中で繰り返されるが、彼が本当に憎みおそれていたのは、自分が属する文明社会の罪深さなのだ。それは鉄砲や磁石を捨てることで完全に削ぎ落とされるような汚れや罪ではない。だから熊との邂逅で自分が体験した自然との一体感に残念ながら一瞬の出来事で、永遠のものではない、狩りの時期が終われば町の学校に戻る自分は、結局自然に対する一時滞在の旅行者、傍観者だということを彼は謙虚に悟る。

そもそもなぜ彼らは狩りをするのだろうか。「熊」と同じく『行け、モーゼ』(*Go Down, Moses*) に収められている短編「デルタの秋」(“Delta Autumn”)に登場する72歳のアイクは次のように語る。

He put them both here, man, and the game he would follow and kill, foreknowing it I believe He said, ‘So be it’ I reckon He even foreknew the end But He said, ‘I will give him his chance. I will give him warning and foreknowledge too, along with the desire to follow and the power to slay. The woods and fields he ravages and the game he devastates will be the consequence and signature of his crime and guilt, and his punishment’ (“Delta Autumn” 349)

狩りへの欲求は人間の本能であり、罪であるという考え方。これは彼がエゴ・コンシャスとエコ・コンシャス両方の視点を持ち、そのせめぎあい苦しんでいることを意味するだろう。本能を押さえ込んで人間中心の視点を完全に捨てることはできず、かといって自然の側の視点を無視するほど傲慢にはなれない。彼の見いだした妥協点は、本能には従うが罪を最小限にとどめることだけである。その方法は二つ。まずは狩りを生活の手段にする、すなわち自然の摂理に従って生き物が殺し殺される秩序に、人間が組み込まれるような狩りをする事だ。例えばフォークナーも影響を受けたとされる、トーマス・ソープの『アーカンソーの大熊』(“The Big Bear of Arkansas” 1841) に登場するハンターは、獲物とは “game” ではなく、“meat” だと言う (51)。罪であろうとなかろうと、生きるために狩りをせねばならないのだ。エドワード・アビーは『砂の楽園』(*Desert Solitaire* 1968) の中で、ある実験について述べている。もし自分が人里離れた自然の中で飢えていて、何も武器を持っていなかったらどうするかと考え、兎に石を投げつけて殺してみたのである。

兎を殺したあとに感じたあの気分の高揚がますます強まっている。この感情は、いままでのぼくには説明のつかないものだが、無視できないほどはっきりと、ぼくの心を支配している。兎が失った魂というのか、生のエネルギーというの

か、そうしたものが、不可思議な方法で、ぼくの魂に入ってきたようだ。・・・ぼくは自分の心をのぞいてみたけれど何の暗い影もない。・・・それどころかこの砂漠の中でいままで感じていた孤独な気持ちがぼくの心の中から消えている。ぼくはいままで砂漠にばらばらにひそむ動物にとって単なるよそのものだった。だが今は違う。ぼくはまわりの生き物の世界に入り込んだ。ぼくらはみんな兄弟だ。(64)

しかし一方で、生きるか死ぬかという、存在の根源にかかわる問題をつきつけられて狩りをする者たちは、なまじ動物との距離が近いため、動物と自分の立場を置き換え、あるいは同一視してしまい、かえって罪を強く意識し、心に暗い影を見てしまうこともあるのではないか。例えば(文化的、宗教的背景の違う作家をここで例に出すのはいささか乱暴ではあるが)宮澤賢治の「なめとこ山の熊」(1920年後半)に出てくる獵師、小十郎。彼は自然界の殺し殺される摂理の中、命を賭けて日々熊と向かいあう。熊を撃つたびに「おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえをうたなけえならね。・・・てめえも熊に生まれたが因果ならおれもこんな商売が因果だ」(89)と詫言を言い、熊に「おまえは何がほしくておれを殺すんだ」と聞かれれば「おれはお前の毛皮と肝のほかにはなんにもいらない。・・・気の毒だけれどもやっぱり仕方がない。けれどもお前に今頃そんなことを言われるともうおれなどは何か栗かしだのみでも食っていて、それで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ」(96)と答える。最後は「おお小十郎おまえを殺すつもりはなかった」(99)と言う熊の言葉を聞きながら、彼は熊に殺される。そのあと熊たちは小十郎の遺体のまわりに集まってじっと祈りを捧げ、山の仲間を弔うのである。

さてアイクたちの狩りはどうかというと、これは、年に一度のランデブー、言うなれば娯楽である。その中でどう罪を軽減させるか、どうやってただの楽しみのためだけにおこなう殺戮とは一線を画すかが問題となる。まずド・スペイン少佐たちは、狩りを年に一度の「儀式」と捉え、様式、決まりごとを守って執り行うことによって、自然の秩序を逸脱しないよう細心の注意を払う。キャンプにはなるべく食料を持ち込まず、射止めた獲物を料理することで、一時的にせよ狩りを「生きるために必要なもの」とする。動物の死に何か付加価値を与えようとするのである。アイクが11歳で初めて鹿を射止めた時、サム・ファーザーズは額に鹿の血を塗ってくれる。そのとき少年は鹿に誓う、“*I slew you; my bearing must not shame your quitting life. My conduct forever onward must become your death*”(“Delta Autumn” 351)。ただこれは命を奪う行為を通して命の尊さを学ぶという矛盾をはらんでいる。少年の成長への通過儀礼のために鹿の命が取引された、人間の自己満足に過ぎないという批判もできるだろう。

このようないわば小細工でもって彼らは何とか狩りの正当性を求めようとするのだが、実は彼らが狩りをする上での最大の「言い訳」になりうるのは、オールド・ベンが存在なのである。オールド・ベンほどの偉大な熊を追うのは、ただやみくもに殺したいからではなく、手の届かない、はかりしれないものに対する憧れと挑戦の気持ちから湧き出る欲求なのだ。ハンターとしての誇りが闘争心をかき立てる。オールド・ベンに引き寄せられる、それが彼らが狩りをする理由であったのだ。

だからこそアイクの苦悩は深い。相手に敬意を払うこともなく、本能のおもむくまま、罪を自覚せず狩りをするものが、狩りを無意味にしたのだ、そして自然の中の運命共同体を破壊し、オールド・ベンも、熊に無条件で引きつけられるハンターも生きられない世界にしてしまったと彼は憤る。さらに文明という破壊する側に属していて、その破壊活動を止める術もない自分

の立場への絶望感は計り知れない。だからもう狩りが終わりになっても悲しむことはあるまいとまで考える。最後のオールド・ベン狩りは、野性の熊と野性の犬の壮絶なぶつかり合いに、年老いたサム・ファーザーズの代理でやはりネイティブ・アメリカンの血を引くブーンが、鉄砲ではなくナイフでとどめを刺して終わる。喉に食らいついたライオンを抱え込んで腹わたをえぐるオールド・ベンの背中にブーンが飛び乗りナイフを降りおろす、そして一体となって倒れていく光景は、さながらウィルダネスの正当かつ時代錯誤な血統者たちによる自爆行為で、部外者アイザックたちの干渉をかたくなに拒むものであった。それでも16歳のアイザックは、一番近い所で大熊の最期を観察することが許され、それを見届けるだけの値打ちのある人間になったことを誇りに思う。こうして伝説の大熊は滅び、その後少佐は森を製材会社に売却する。森には鉄道のレールが引かれる。それでも月並みな物言いであるが、現実としてのオールド・ベンは滅びたものの、熊の持つ野性の精神は不滅のものとして、アイクの心に刻み込まれている。「経験の場」でエコセントリックな視点に目覚めた彼は、熊の精神に導かれ、苦悩の中自分の血統を問いただす。そして21歳のとき、もうこれ以上先祖の罪に加担しないよう、自然の搾取と奴隷制度によって築かれた先祖の農場を放棄するのである。

#### Works Consulted

- Faulkner, William. "The Bear," "Delta Autumn." *Go Down, Moses*. 1942 New York Vintage Books, 1973.
- Thorpe, Thomas Bangs "The Big Bear of Arkansas" *The Mirth of the Nation*. Walter Blair and Raven McDavid, Jr. eds. Minneapolis U of Minnesota Press, 1983.
- Utley, Frances Lee, Lynn Z. Bloom, and Arthur F. Kenney, eds. *Bear, Man, and God: Eight Approaches to William Faulkner's "The Bear."* New York Random House, 1971.
- エドワード・アビー（越智道雄訳）『砂の楽園』東京書籍、1993。
- スコット・スロヴィック／野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉を読む』 ミネルヴァ書房、1996。
- 宮澤賢治 「注文の多い料理店」『宮澤賢治全集8』ちくま文庫、1986。
- 「なめとこ山の熊」『宮澤賢治全童話・風の又三郎』角川文庫、1996。